保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順の開発

―私立御南保育園でのアクション・リサーチ―

渡　邊　祐　三*，横　松　友　義**

（平成23年６月14日受付，平成23年12月８日受理）

Developing a Procedure to Clarify Self-Evaluation Views regarding Practices of Care and Education in Preschools on the Basis of the Curriculum in the Preschools：

Action Research Conducted in Minan Private Preschool

WATANABE Yuzo *，YOKOMATSU Tomoyoshi **

This study examines the curriculum management of preschool care and education in Japan. It aims to develop a procedure to clarify self-evaluation views regarding practices of care and education in preschools on the basis of the curriculum in the preschools.

The action research conducted in Minan Private Preschool clarified the following. After developing a complementary curriculum on the basis of the theoretical framework of complete care and education in preschools and on the aims and contents stipulated in the Day Care Guideline, we can establish self-evaluation views regarding care and educational practices in preschools by using the above-mentioned framework, guidelines for practices in the preschools, and matters stipulated in the Day Care Guideline.

Key Words: practices of care and education in preschools, self-evaluation views, the curriculum in the preschools,theoretical framework of complete care and education, the Day Care Guideline

１．本リサーチの背景と目的及び方法

保育所保育指針は，2008年の改定により，2009年度から法的拘束力を持つものになった。「保育計画」という用語は「保育課程」に改められ，これまで以上に，各保育園(注1)の保育の一貫性，体系性，組織性，計画性が重視されることになった(1)。さらに，各保育園には，保育の目標・全体計画を明確にして，その計画に基づき実践を展開し，自己評価し，改善することが求められている(2)。

しかし，このように，保育園保育の基準が改められても，それが保育現場で実現する保障はないといえる。例えば，幼稚園では，教育の基準が示される幼稚園教育要領が1989年に改訂され，遊びを通しての指導を中心とする，環境を通しての教育が，打ち出されたが，放任になっているとか学級崩壊につながったとかいう指摘がなされるようになった。例えば，小田は，次のように述べている(3)。「幼稚園教育では，『主体性』という言葉が間違えて捉えられて独り歩きし，あたかも教師の必要性がないような教育の傾向が生まれてしまいました。『自由感あふれる』と表記したにもかかわらず,『子どもは自由である』というような捉え方をしてしまったのです。」

こうした教育の基準についての改革の成果が現場で現れないと言われる問題は，幼稚園だけのことではない。小学校や中学校や高等学校でも，同様な問題が生じてきた。そして，その解決を求めて，組織に必要とされる条件整備（人・物・財・組織運営の面での条件整備）についての研究，つまり，教育課程経営研究ないしカリキュラムマネジメント研究が確立してきたのである。

教育課程経営論の嚆矢と言われる(注2)高野は，戦後の教育改革に成功感があまりないことを問題視して，その解決策について考察している(4)。「教育課程や授業の内容そのものの基準が改革され，また学校がそれに沿って改革の努力をしても，それだけでは，そもそも教育課程改革とはならなかった。」「今日の教育課程改革論は，もはや単なる教育内容編成の改革論ではなく，その条件づくりをも含み，見通す『教育課程経営改革論』でなければ，有効性を発揮し得ないと思われる。」（傍点は高野）ここで言われている「教育課程経営」とは，「単に教育課程の内容をどうするか(教育課程内容論)，ということだけでなく，教育課程内容の計画=編成(Ｐ)→その実施=展開(Ｄ)→評価(Ｓ)を進めていく過程でなされる，さまざまな組織・

* 御南保育園(Minan Preschool)
** 岡山大学(Okayama University)

運営上の条件づくり(条件整備)を意味している」（傍点は高野）。つまり，高野は，教育課程の内容改革とそれに対応する条件整備とを，Ｐ－Ｄ－Ｓサイクルを回しながら進めていく「教育課程経営」の必要性を主張しているのである。

その後，「教育課程経営」という用語の代わりに「カリキュラムマネジメント」という用語を用いる研究者が現れてくる。例えば，中留[5]は，地方分権が進んできて，教育課程の大綱化・弾力化が進んで学校の自律性が強まる中で，「静態的」で「硬直化したイメージ」を持たれている「教育課程」という用語に代えて，それを編成する「主体者の裁量の広がり」や「文化」としてとらえること等を含めたより広い意味の「カリキュラム」という用語を用い，「カリキュラムマネジメント」と言っている。また，中留・田村[6]は，2004年の段階で，カリキュラムマネジメントについて，次のように解説している。「カリキュラムマネジメントをあえて定義づけるとすれば，それは，『各学校が教育目標の達成のために，児童・生徒の発達に即した教育内容を諸条件とのかかわりにおいてとらえ直し，それを組織化し，動態化することによって一定の教育効果を生み出す経営活動である』ということになる。」「この定義の文言である『組織化し，動態化する』というのは，教育目標達成のための教育内容を編成，実施，評価，改善（Ｐ－Ｄ－Ｓ－Ｉ）する一連の経営活動のプロセス(サイクル）を意味する。」したがって，「ここで言う一定の教育効果とは単なる『プロダクト』ではなく，Ｐ－Ｄ－Ｓ－Ｉのインプルーブメント（Improvement）にあるように最終的にカリキュラムマネジメントはそれによって，学校を改善することに向けられる。」つまり，カリキュラムマネジメントは，教育目標を達成するための教育内容とそれに対応する条件整備とを，Ｐ－Ｄ－Ｓ－Ｉサイクルを回しながら実現していく経営活動であり，最終的に，学校改善に向かっていくということである。

なお，田村は，Ｐ－Ｄ－Ｓ－ＩサイクルのＳの中に実質的にＩの作業が含まれ，また，Ｐ－Ｄ－Ｓ－ＩサイクルとＰ－Ｄ－Ｃ（Check点検）－Ａ（Action行動）サイクルは同義であるととらえる[注3]。つまり，Ｐ－Ｄ－Ｓ＝Ｐ－Ｄ－Ｓ－Ｉ＝Ｐ－Ｄ－Ｃ－Ａということである。

さらに，倉本は，それまでのわが国におけるカリキュラムマネジメント研究について，「一定の教育課題に特化したカリキュラムの方法・内容論や，その学習者である生徒への教育的効果，及び学校と学校外組織との『協働性』に関するカリキュラムマネジメント論の領域までは，十分な理論的整理が行き届いているとは言い難く，そこに必然的な理論的限界点を持っている」と考察する[7]。そして，その発展のために，アメリカのカリキュラムマネジメントに注目し，先行理論研究とサービス・ラーニングの分析・検討をとおして，次の点に関する理論的実証的な研究成果をあげている[8]。「教育目標達成のための教育内容・方法上の指導系列（Curriculum & Instruction）としての教育活動と，それをサポートする条件整備としての組織経営活動（Management）の 2 系列において，その目標に対応した成果を生成するカリキュラムPDS過程という動態的概念がカリキュラムマネジメントであり，カリキュラムの開発・経営論を中核に据えれば，学校組織システムの改善過程に有効性を持ち，生徒の教育効果を上げることが可能となる。」[9]

こうした，カリキュラムマネジメントにより教育課程改革そして学校改善を実現していこうとする研究動向を参考に，今日では，幼稚園においても，山中ら[10]によりカリキュラムマネジメントの考え方による研究が開始されている。

本稿で注目している保育園においても，保育の基準についての改革を現場で実現するために，カリキュラムマネジメントの考え方を導入しようとする新たな研究が開始されている。岡山市の私立御南保育園における，保育目標を明確にして，一貫性，体系性，組織性，計画性を保持しながら園の保育を実践し改善していくための手順を開発するアクション・リサーチが，それである[11]。園名を公表することについては，園より了承されている。

まずは，アクション・リサーチにおいて重要となる，リサーチ開始前の御南保育園の状況説明を行う。

2002年 4 月 1 日に，岡山市初の幼・保一体型施設として，岡山市御南幼児教育センターが開園し，その一方の御南保育園については，社会福祉法人橘会が経営することになった。この御南保育園では，2001年 6 月に岡山市・岡山市教育委員会が作成発表した「岡山式カリキュラム」の考え方に沿って保育を展開することになった。しかし，この「岡山式カリキュラム」の保育目標をそのまま園の保育目標にすると，実際の保育の考え方や実践に対応しないという重大な問題を抱えることになった。

それに対して，園長は，30年以上に及ぶ保育経験を基礎にしながらも，改めて保育の原点に立ち返り，園独自の保育論・保育計画（今日の保育課程に対応）・保育実践を確立したいと考えていた。このことの実現のために，岡山式カリキュラムの内容についての独自のとらえ方を明らかにすることが，園の課題となっていた。

そこで，御南保育園では，保育方法論やカリキュラムについて研究している外部支援者と協働することにして，アクション・リサーチが開始され，2008年 6 月から2009年 9 月にかけて，次の成果が得られている。まず，保育士が保育現場で実際にその達成を目指しており，同時に，保育士が納得できている保育目標を，実効のある保育目標ととらえ，その明確化手順が，続いて，成立した保育目標を実現するための保育全体の理論的枠組みの明確化手順が開発されている。そして，園の創意工夫の

積み重ねの中から生み出された実効のある保育目標及び保育全体の理論的枠組みを保持しながら，同時に，保育所保育指針において基準として示されている保育の目標・ねらい・内容を保障することを意識した，保育課程編成手順が開発されている。

本アクション・リサーチでは，以上の成果を生かして，保育園現場が一貫性，体系性，組織性，計画性を保持しながら保育を実践し改善できるようにするために，保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順を開発することを目的とする。なお，導き出された自己評価観点は，まず，指導計画に記述されている保育実践内容が，保育課程を具体化できているかどうかを自己評価する際に活用され，最終的に，保育実践そのものの自己評価観点として活用される。ここで「活用」と述べるのは，実際の評価段階で，例えば，保育実践時に保育者の主体性と柔軟性を保障するために，自己評価観点を精選する等の可能性があるからである。実際の評価段階についての研究は今後の課題である。

保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順についての仮説をあげると，それは，次のとおりである。保育全体における位置づけが共通するものごとに園の保育実践を分類し，対象保育実践を決定する。決定された対象保育実践の自己評価観点は，保育課程の前提にある保育全体の理論的枠組みの観点と，指導上の留意点の観点と，保育所保育指針で重視されているねらい等の観点とから明確にできる。

この仮説により，第一段階として，執筆者らが，対象保育実践を決めて，前述の三つの観点から自己評価観点を案出し整理する。次いで，第二段階として，対象保育実践及び園の保育全体について理解できていると評価されている複数保育士が，その自己評価観点の明確化手順と導き出された案が，その園の考え方として妥当かどうかを検討する。つまり，仮説による保育実践の自己評価観点明確化手順と自己評価観点案が，園の保育課程に基づくものとして妥当であるかどうかを所属保育士の蓄積してきた保育経験及び知識に基づいて検討し検証しようとするわけである。なお，検討の結果，修正が必要であれば，自己評価観点の明確化手順及び自己評価観点案は修正する。

園の保育全体について理解できていると評価される複数保育士により共通理解された対象保育実践の自己評価観点は，その後，園内で他の職員に説明され再検討される，また，保護者や地域住民に説明し意見を求めていく出発点になるものと位置づけられる。

リサーチ結果を解釈・検討する観点について明確にしておく。アクション・リサーチは，一般化された法則を明らかにすることよりもむしろ，現実の変革を目指す研究である。したがって，結果に関しては，秋田が整理しているように，問題解消の「有効性」，コスト・パフォーマンス等からの「実用性」，場を共有する人や類似場面にいる人の「受容性」の観点から解釈すると共に，その検討は，「同じデータを分析したときにどの程度同じ結論にいたるかという内的一貫性としての信頼性」の観点から行う[(12)]。その成果は，他者に受容・活用・修正されていく形で，より適用範囲の広い，より一般的なものへと発展していく。

本リサーチにおける執筆者の役割は，次のとおりである。第一執筆者は，御南保育園副園長の立場で，第二執筆者と共に目的と仮説を設定した上で，仮説に基づいて自己評価観点を案出し，園内での検討・修正を統括する。第二執筆者は，カリキュラム研究者の立場から，第一執筆者と共に目的と仮説を設定した上で，研究が順調に進んでいくように定期的に助言を行う。

2．実効のある保育目標の明確化から保育課程編成までの過程

保育実践の自己評価観点明確化手順の開発の前提にある，実効のある保育目標の明確化から保育課程編成までの園内での協議・合意過程を概説する。

1）実効のある保育目標に関する考え方の明確化手順について

最初に，園長と副園長と外部支援者が協議し，実用性の観点から，保育士の負担軽減を考えて，外部支援者が，必要資料を収集した上で，共同検討資料を作成している。

保育現場で実際に達成が目指されている保育目標を得るために，園内で，実践記録等を収集し，保育実践に関する聞き取りを行っている。また，所属保育士が保育目標について納得できるように，教育基本法での「幼児期の教育」の規定について理解を深める資料を収集している。「人格の完成」へ至る過程と人格完成へ至るための「基礎」についての理解を深めるための資料を，実用性の観点から，現在購入でき一般によく知られていると考えられるものに範囲を限定し，収集している。

続いて，外部支援者は，収集資料を分析し考察した上で，人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎に関する考え方と，その考え方を背景に明確にされている保育目標という形の共同検討資料を作成している。園長と副園長がその共同検討資料の内容が妥当かどうかを検討して外部支援者に助言することを繰り返し，最終的に合意されたものをその時点での保育目標に関する考え方としている。この確定手順については，次のように考えられている。この園は私立であり，創立時から，園長の保育実践から形成されてきた保育の考え方を明確にし，検討し，発展させることを，園の基本的考え方としている。したがって，園長とその補佐役である副園長が

妥当と判断するという手続きで，最初に，今後職員全体で検討発展させていく元になる保育目標に関する考え方を明確にしている。

2）実効のある保育目標を達成するための保育全体の理論的枠組みの明確化手順について

1）と同様の考え方で，外部支援者が，保育の実際に関する資料を園内で収集した上で，共同検討資料を作成している。外部支援者は，保育全体の理論的枠組みを明確にするために，共同検討資料の項目として，「保育の基本」，「保育目標」，「目指す子ども像」，「保育内容の構成の仕方」，「保育形態」及び「保護者とのかかわり方」をあげると共に，その評価についての考察も参考資料として加えている。そして，「保育目標」と「保育内容の構成の仕方」，「保育形態」，「保護者とのかかわり方」との関係も記述している。最終的に園長と副園長と外部支援者に合意されたものをその時点での保育全体の理論的枠組みとしている。

3）実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みについて

保育実践の自己評価観点明確化手順に直接関係する，「保育目標」そのものと「保育内容の構成の仕方」と「保育形態」をあげる。ここでは，その後に一部修正を加えられた保育課程編成時のものをあげている(注4)。

（1）保育目標

イ）　十分に養護の行き届いた環境の下に，くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし，生命の保持及び情緒の安定を図る。

ロ）　表現しきれる体力・気力を育てる。

ハ）　美しい自然，すばらしい自然，自然の中での驚きを感じる感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる。

ニ）　自然のサイクルの実感や自然に生かされている感覚を育てる。

ホ）　感動したものを表現する心を育てる。

ヘ）　自分で考え，あるいは，自分たちで考え話し合って，生活を創っていく力をつける。

ト）　他を応援する，年下の子のために仕事をする子に育てる。

チ）　「ありがとう」の気持ちを育てる。

リ）　保護者の方々と共に子どもたちを育てたい。

（2）保育内容の構成の仕方［主に保育目標のイ），ロ），ハ），ニ），ホ），ヘ）と関係］

養護面では，生命の保持及び情緒の安定を図ることを常に意識しておく。

教育面では，一日の最初に，縄跳びや鉄棒などで体力・気力の充実と心の満足及び身体の安定を図る。このことをみんなで行うことで，園生活を始めることのできる覚醒状態になり，一体感を持てると共に，長期的に見ても，力強く安定した身体を育てることになる。朝の自由遊びの後，0歳児クラスから，それぞれクラスごとに朝の会を行い，自分で考えて，あるいは自分たちで考え話し合って，生活を創っていく力とクラスの一体感を培っていくことが重視される。朝の会の後には歌を歌い，歌に込められた大切な心情をとらえ，表現して，その大切な心情の中に浸り，心地よさを実感していく。なお，3歳未満児については，朝の会以外にも頻繁に歌を歌う。その後の1日においては，自然とのかかわりの中でセンス・オブ・ワンダーの感覚を豊かにし，これらを子どもの遊び・表現の基礎と考え，生じてくる子どもの思いを受け止め，十分に自己を実現していくことを基本的考え方とする。その積み重ねの中で，子どもたちは自然のサイクルを実感していく。また，自然に生かされている感覚も培っていく。なお，4歳以上児は，1日の中に読書の時間を設けて，静かに集中することを重視する。

0歳児クラスより，それぞれクラスごとに午後のクラス会（午後3時半以降の自由活動の前，5～15分程度）で，1日の生活を振り返り，明日への期待につなげていく。この午後のクラス会では，朝の会と同様に，自分たちで考えて，あるいは，自分たちで考え話し合って，生活を創っていく力とクラスの一体感を培っていくことが重視される。

以上からの体力・気力の充実や心身の安定や子どもたちの一体感を前提とした上で，言葉のやりとりや人間関係の育ちは保障される。

（3）保育形態［主に保育目標のト），チ）と関係］

年齢ごとでクラスを編成し保育をしているが，年下の子どもが年上の子どもや保育士等の姿を見て憧れや目標の明確化ができるように，また，年上の子どもが年下の子どもの生活を整えたり，子ども同士で応援し合ったりできるように，異年齢交流のできる形態の確保を重視する。

4）実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みの保育士集団による確認(13)

1）と2）で明確にされた，実効のある保育目標及び保育全体の理論的枠組みは，その後，保育士集団に説明され，自由記述の質問紙調査の結果，彼女らにこれらの内容が確認されて，次の意識変化が生じていることが認められている。園の保育の一つ一つの意味が理解できた。園の保育を推進していきたい。園の保育についての誇りや自信が強まった。自己向上への意欲が生じた。周囲に対して園の保育をより大きく打ち出したい。

5）保育課程編成過程の概要(14)

保育課程編成では，まず，園長の代理という立場の副

園長と，各年齢のクラスのリーダー保育士５名（０・１歳児クラス１名，２歳児クラス～５歳児クラス各１名）と，経験豊かで園の保育も充分に理解している保育士１名を担当者としている。その７名全員から，園独自の保育観に基づく保育課程編成をという声が上がっている。

基本的に，園独自の実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みを前提にして保育課程を編成するために，副園長が，外部支援者と協議の上で，次の編成手順を構想し，関係保育士に協力を求めている。園の独自性といえる保育全体の理論的枠組みとしては，「保育目標」，「保育内容の構成の仕方」，「保育形態」に特に注目する。保育所保育指針の方針を表すものとしては，保育の目標・ねらい・内容に特に注目する。その上で，両者の基本的な考え方は維持しながら目標レベルから活動レベルへと両者を関係づけたり整合するように部分的に修正したりする。その際に，園の保育全体の理論的枠組みについて，その記述は保育所保育指針の目標・ねらい・内容と整合するよう修正するが，その内容は保持する。この基本的考え方に基づき，「具体的課題の設定→実行内容」を発展的に繰り返した上で，保育課程を編成している。

成立した保育課程は，その後，職員により，指導計画そして保育実践へと具体化されるように努められている。

３．自己評価観点明確化手順の開発過程－朝の運動遊びを対象に－

ここにおいて，一定保育実践を対象に，１で述べた保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順に関する仮説を適用する。ここで言う一定保育実践とは，朝の運動遊びである。この遊びを最初の対象としたのは，次の理由からである。朝の運動遊びは，園生活において，園児に一日の始まりを知らせると共に，異年齢集団で行う最初の活動であり，その効果は，その後の全ての日課に影響を与えている，したがって，最初にこの活動に仮説を適用して自己評価観点を明確にすることは，自然にして必要なことであると考えるからである。

第一段階として，執筆者らは，より正確な判断ができるように，朝の運動遊びの概要を確認した上で，仮説の適用により，園の保育実践の自己評価観点を案出する。

１）朝の運動遊びの概要

（１）保育目標

保育課程では，朝の運動遊びは，領域「健康」における重点活動として，また，領域「人間関係」と領域「言葉」に関係する活動として位置づけられている。その保育目標には，前述の園の保育目標イ）～リ）の内，次の三つが該当する。

ロ）　表現しきれる体力・気力を育てる。

ヘ）　自分で考え，あるいは，自分たちで考え話し合って，生活を創っていく力をつける。（その基盤として心身の安定，覚醒状態，一体感をもたらす活動として位置づく。）

ト）　他を応援する，年下の子のために仕事をする子に育てる。（「他を応援する」部分のみが該当する。）

（２）活動内容

御南保育園では，朝の運動遊びは開園時より形態を変化させながら実践していたが，2007年１月，表１の内容に変更し，現在に至るまで小変更を加えながら継続して実施している。

（３）朝の運動遊びの指導上の留意点

朝の運動遊びにおける保育士の指導上の留意点を類型化し，表２にまとめる[注5]。

２）園の保育全体の理論的枠組みから導かれる自己評価観点

（１）保育内容の構成の仕方から導き出される自己評価観点

保育内容の構成の仕方についての考え方における朝の運動遊びにかかわる部分は，次のとおりである。

一日の最初に，縄跳びや鉄棒などで体力・気力の充実と心の満足及び身体の安定を図る。このことをみんなで行うことで，園生活を始めることのできる覚醒状態になり，一体感を持てると共に，長期的に見ても，力強く安定した身体を育てることになる。

つまり，朝の運動遊びの主なねらいは，次のとおりである。

○　体力・気力が充実する。
○　心が満足し，身体が安定する。
○　覚醒状態になる。
○　一体感を持つ。

全体として，朝の運動遊びは，保育課程上は，主に，体力・気力の育成を保障しようとするものであり，一日の生活上は，降園まで幼児が安定して生活を創っていくための基盤になるものであるととらえられている。

（２）保育形態から導き出される自己評価観点

朝の運動遊びにおいては，基本的に次の保育内容を考慮した異年齢交流のできる保育形態がとられている。

○　年下の子どもが，年上の子どもや保育士等の姿を見て憧れを抱いたり目標を明確にしたりする。
○　子ども同士で応援し合う。

３）指導上の留意点から導き出される自己評価観点

朝の運動遊びにおける保育士の指導上の留意点は，次の三つの観点に類型化できる。

○　子どもの意欲を誘発する。
○　子どもが成功でき充実感を得やすいようにする。
○　子どもの充実度を増す。

表１　朝の運動遊び全体の流れ

時間	概要	環境構成と活動の目安
8:30 ～8:50	○ランニングをする。 （朝の準備ができた子から順次園庭に出て，トラックを約５分程度走る。） ○全員で挨拶・ストレッチ・体操をする。 ○走り跳びをする。（クラスごと・異年齢） **図１　走り跳びをする５歳児と３歳児**	・雨天時以外は毎日行う（月～金）ことを基本とする。 ・場所は３歳以上児用の園庭を使用する（約 780 ㎡※幼保共有）。 ・トラックの大きさは，１周が 65m以上とれるようにする。 ・走り跳びのおおまかな目安 ○２歳児・３周～５周 ○３歳児・５周～10周 ○４歳児・８周～15周 ○５歳児・10周～20周 ・２歳児は，発達に応じてその後の活動内容を決定する。
8:50 ～9:00	○並行跳びもしくは短縄跳びをする。（３歳児については，発達状況を考慮した上で，年度前半は，保育士と長縄跳びをし，年度後半は，短縄跳びをする。） **図２　並行跳びをする５歳児**	・並行跳び（保育士が長縄を回し，その中に子どもが走り跳びで入って，前跳び・綾跳び・交差跳びをする。）もしくは，短縄跳び（前跳び・後ろ跳び・綾跳び・交差跳び・２重跳びの中から内容を織り混ぜて行う。）のどちらかを保育士の判断で実施する。 ・並行跳びの回数のおおまかな目安 ○４歳児・15回～20回　○５歳児・20回以上 ・短縄跳び（前跳び・後跳び）の回数のおおまかな目安 ○３歳児・それぞれ 30回～50回 ○４歳児・それぞれ 50回～100回 ○５歳児・それぞれ 100回以上
9:00 ～9:30	○好きな遊びをする。（時候がよい時は活動時間を延長することもある。）	・遊びの内容は，基本的に，前日午後のクラス会での話し合いにより決定する。
9:30～	○鉄棒をする。 **図３　異年齢での鉄棒の様子**	・場所は屋外用鉄棒（４連）を使用する。 ・鉄棒の回数のおおまかな目安（鉄棒の高さ） ○３歳児・逆上がり１回，後ろ回り10回（77 ㎝） ○４歳児・逆上がり１回，後ろ回り15回（97 ㎝） ○５歳児・逆上がり１回，後ろ回り20回（107 ㎝） ・冬季は鉄棒が冷たく，握力が低下するため，実施しない。代わりに，別の時間に遊戯室で室内用鉄棒をすることもある。

４）保育所保育指針のねらいから導き出される自己評価観点

朝の運動遊びの目標及び保育内容は，保育所保育指針の考え方との整合性を確保する必要がある。朝の運動遊びの場合，特に関係するといえる領域「健康」と領域「人間関係」の次のねらいとの整合性を確保することを基本とする必要があると考えられる。

○　「明るく伸び伸びと行動し，充実感を味わう。」

○　「自分の体を十分に動かし，進んで運動しようとする。」

表 2　朝の運動遊びにおける指導上の留意点

種目	走り跳び	短縄跳び・並行跳び・長縄跳び	鉄棒
年齢	（2 歳以上児）	（3 歳以上児）	（3 歳以上児）
①子どもの意欲を誘発する	○子どもに目標を認識させる。 ○保育士は，ガキ大将となって先頭でスピードのある美しい走り跳びを見せる。 ○順番は，年長児を最初にすることで，年少児は年長児が走る姿を間近で見ることができ，年長児も年少児に美しい走り跳びを見せようと意識して取り組むことができる。	○短縄跳びをする際に，保育士は，子どもと一緒に行い，回数を数える。また，例えば，4 歳児と 5 歳児が向かい合って短縄跳びを競ったり，3 歳児と 5 歳児のクラスを混合して行ったりなど，常に異年齢でお互いが見合うことができ，意識し合える環境を構成する。	○年長児の美しい後ろ回りが間近で見えるようにする。 ○順番を待っている子どもたちには，鉄棒をしている子の回数を数えたり，応援したりするように促す。（そのことは，異年齢交流の充実にもつながる。） ○日によって，子ども同士で回数を競い合ったり，（足掛け回りや連続後ろ回りなどの）新しい技に挑戦したりしながら，意欲的に活動に取り組めるように工夫する。
②子どもが成功でき充実感を得やすいようにする	○縄の材質は，綿縄で太さを 8 ㎜とし，取手がないものとする。 ○短縄の長さは，各年齢の子どもが縄の中心を足で踏んで両肩までの長さ＋両手のひらにそれぞれ 1 回転させた長さとする。 ○トラックは，なるべく直線が長く，カーブが緩くなるようにして，走る速度が落ちないようにする。	○短縄跳びの際に，前跳び・後跳びは必ず同数行う。その際に，技の発展の妨げとなる 2 拍子跳びはさせない。 ○並行跳びの際に，保育士は，個々の跳ぶテンポを把握し，縄を回すスピードと，長さに配慮する。 ○並行跳びの際に，長縄の回し手の片端は，同年齢の子どもに持たせるようにする（保育士が子どもの回転速度に合わせやすくするため）。	○子どもが確実に鉄棒の技術を習得できるように，保育士は，3 歳児を補助する際に，子どもが後ろ回りの動作に入る際に勢いがつき過ぎないよう注意し，場合によっては，回転時に手で園児の背中を軽く押さえて，鉄棒と身体が離れないように補助を行う。 ○ 4・5 歳児で逆上がりができにくい子の特徴として，蹴り上げが弱い・蹴り上げの高さが足りない・蹴り上げの際に上体が持ち上がらないことがあげられる。そうした子に対しては，時間以外にも機会を捉えて個別に対応する。
③子どもの充実度を増す	○走り跳びは，異年齢集団が，運動場を一杯に使って，テンポよく行い，活動の流れが切れないようにすることで場に心地よい一体感と勢いが生まれるようにする。	○等しく全員が習得することができるように，保育士は，個人差に配慮して適切な補助や助言を行いながら見守ったり，援助したりする。	○その日，大きな成長がみられた子や応援態度が素晴らしかった子については，全員の前で発表し，翌日への意欲を引き出すと共に，クラスの全員に集団としての共通の目標として認識させる。

○　「健康，安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。」（「健康」に関する部分のみが該当する。）

○　「保育所生活を楽しみ，自分の力で行動することの充実感を味わう。」

○　「身近な人と親しみ，関わりを深め，愛情や信頼感を持つ。」

5）保育所保育指針の「安全管理」及び「職員の資質向上」から導き出される自己評価観点

安全に関する事項と職員の資質向上についての事項が保育所保育指針で重要視されていることから，朝の運動遊びにおける安全管理と職員の成長については，保育所保育指針との整合性を図っておく必要があると考えられる。

○　園庭の環境の安全管理を実施する。

○　保育士一人一人が課題を持って主体的に学ぶ環境を整備し，保育の専門性を高めることができるように配慮する。

6）導き出された自己評価観点の整理

本リサーチの仮説に基づいて導き出された朝の運動遊びの自己評価観点全体を分析・整理する。なお，それら諸観点の関係づけ及び評価の仕方については，本研究の次の課題と考えているので，ここでは考察していない。

まず，朝の運動遊びの保育目標，保育内容の構成の仕方，保育形態の観点から，次の自己評価観点を得ることができる。

①　体力・気力の育ち
②　心身の安定
③　覚醒水準の高まり
④　一体感の強まり
⑤　年上への年下の憧れ
⑥　年下に対する年上としての自覚
⑦　他を応援しようとする気持ち・態度

次に，指導上の留意点と保育所保育指針のねらいの中で本研究に特に関係する部分から，次の自己評価観点を得ることができる。

⑧　身体活動への意欲の育ち
⑨　身体活動での充実感

なお，領域「健康」の健康な生活に必要な習慣や態度を身に付けるというねらいについては，健康面は，①②⑧⑨を中心に全ての観点の育ちをとおしてその達成が目指されている。したがって，このねらいはここではあげないことにする。また，領域「人間関係」のねらいについては，①から⑦の育ちをとおして，達成することが考えられているので，あげないことにする。

さらに，保育所保育指針では，安全や保育士の成長が重視されていることから，次の自己評価観点もあげることができる。

⑩　安全管理
⑪　保育士の成長への配慮

7）自己評価観点の明確化手順とその案の妥当性についての検討

（1）共同検討者の選定

共同検討者となる保育士は，朝の運動遊びを行う2歳児以上の保育を担当する中堅保育士4名に，朝の運動遊びを主に担当している男性保育士1名を加えた計5名とした。園の保育全体も十分に理解し，朝の運動遊びの保育目標や保育上の位置づけも理解していると考えられる保育士を対象とした。

（2）手続き

第1執筆者が自己評価観点の明確化手順とその内容の妥当性を検討するという目的を対象保育士に口頭説明した後，3の1）から6）までの本文を読んでもらう（本論文には，その内容が変わらない範囲で，書式変更や全角半角の仕方の変更や字句・言い回しの修正や以上に伴う表の位置変更を行っているものを掲載している）。園の保育全体の理論的枠組みは，各保育士とも把握しているので，省略している。その後，下記の質問を行い，口頭で回答を得た。実施日は2010年1月8・9日（金・土）である。

- 自己評価観点の明確化手順（自己評価観点案も含む）は理解できたか。
- 自己評価観点の明確化手順は妥当か。
- 自己評価観点の明確化手順が妥当でないとすれば，どこを，どのように改善すべきか。

（3）共同検討の経過と結果

共同検討者の保育士全員から，今回の自己評価観点の明確化手順とその内容について，理解でき，妥当であるという回答を得た。つまり，対象保育実践について十分に理解している保育士たちに受容されたわけである。ただし，1名からは今後の課題として，次の回答を得た。「朝の運動遊びは健康領域だけでなく，自然等の環境や生命の保持（特に低年齢児）など，全ての領域に関係する保育活動である。したがって，そういったことを勘案した自己評価観点を導き出すことができれば，実践そのものもより良いものになると思う。」

そこで，この課題を達成するための自己評価観点の追加と，それに伴う保育課程についての記載内容の追加・修正を行った。整理すると，次のようになる。

第1に，朝の運動遊びは，子どもが，朝の気持ちの良い空気の中で，風や光を感じ，季節変化に気づき，月や太陽などの天体に興味を持つという環境に関するねらいを持っていると考えられる。そこで，次の自己評価観点を追加する。

追加観点①　月，風，太陽，気温，影などの自然を五感で感じること

第2に，朝の運動遊びは，子ども一人一人の健康状態を把握するという養護に関するねらいを持っていると考えられる。そこで，次の自己評価観点を追加する。

追加観点②　心身の健康状態の把握

第3に，保育全体の理論的枠組みが追加した自己評価観点と整合するように，「保育内容の構成の仕方」を部分修正する。ここでは，直接関係ある部分だけを明示することとし，変更箇所には，次のとおり下線を引いている。

養護面では，生命の保持及び情緒の安定を図ることを常に意識しておく。<u>特に朝の受け入れ時と朝の運動遊びの時は注意する。</u>

教育面では，一日の最初に，<u>五感で自然を感じながら，</u>縄跳びや鉄棒などで体力・気力の充実と心の満足及び身体の安定を図る。

第 4 に，保育課程編成表が追加した自己評価観点と整合するように，必要な追記を行う。領域「環境」の欄と養護「生命の保持」の欄に，朝の運動遊びに関する記述を追加する。

この 4 点は，調査対象保育士 5 名と副園長と外部支援者により合意され，つまり，7 名全員に受容された。その結果，朝の運動遊びの自己評価観点は，次の13項目と確定した。

① 心身の健康状態の把握
② 体力・気力の育ち
③ 心身の安定
④ 覚醒水準の高まり
⑤ 一体感の強まり
⑥ 自然に対する五感の働き(注6)
⑦ 年上への年下の憧れ
⑧ 年下に対する年上としての自覚
⑨ 他を応援しようとする気持ち・態度
⑩ 身体活動への意欲の育ち
⑪ 身体活動での充実感
⑫ 安全管理
⑬ 保育士の成長への配慮

4．総括的考察と今後の課題

御南保育園は，カリキュラムを研究している外部支援者と協働し，「実効のある保育目標」と「保育全体の理論的枠組み」を明確にして，保育課程を編成してきた。

その上で，保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順を開発するために，次の仮説を設定した。保育全体における位置づけが共通するものごとに園の保育実践を分類し，対象保育実践を決定する。決定された対象保育実践の自己評価観点は，保育課程の前提にある保育全体の理論的枠組みの観点と，指導上の留意点の観点と，保育所保育指針で重視されているねらい等の観点とから明確にできる。この仮説により，園長の代理として副園長が中心になって，朝の運動遊びを対象に，保育全体の理論的枠組みの観点と指導上の留意点の観点と保育所保育指針のねらい等の観点から，次の手順で，保育実践の自己評価観点を明確化できた。

第 1 に，対象保育実践の保育目標と全体の流れと指導上の留意点を明確化する。第 2 に，園の保育全体の理論的枠組みから，保育目標以外の対象保育実践の自己評価観点を導き出す。第 3 に，指導上の留意点から，対象保育実践の自己評価観点を導き出す。第 4 に，保育所保育指針のねらいの観点から，対象保育実践の自己評価観点を導き出す。第 5 に，保育所保育指針のその他の必要な観点から，対象保育実践の自己評価観点を導き出す。第 6 に，導き出された自己評価観点全体を分析・整理して内容が重複するものは削除する。第 7 に，対象保育実践を行い，その内容の園内での位置づけを理解している複数保育士が，自己評価観点の明確化手順とその内容の妥当性について検討する。第 8 に，その結果により，自己評価観点の明確化手順の妥当性を確認すると共に，自己評価観点に必要な追加あるいは修正を行い，関係したメンバー全員による最終合意を得る。

このようにして，仮説による，一定保育実践の自己評価観点明確化手順に関しては，その妥当性が確認された。このことについては，次のように考える。保育課程は，園の保育全体の理論的枠組みを保持しつつ，保育所保育指針のねらい等を保障するものになるように編成されている。したがって，園における保育実践は，園の保育全体の理論的枠組みの観点と保育所保育指針のねらい等の観点を踏まえたものになる必要がある。また，執筆者らがより正確な判断をするために注目した指導上の留意点は，保育現場の資料から明確化されている保育全体の理論的枠組みと整合しているので，自己評価観点は，それらを踏まえたものになる必要がある。つまり，一定保育実践の自己評価観点は，これらの三つの観点から導き出されれば，保育課程に基づいているといえるものになると考えられるのである。

しかし，自己評価観点そのものについては，追加・修正がなされ，その追加・修正と整合するように，保育全体の理論的枠組み及び保育課程編成表の記載内容も追加・修正されることになった。この点については，次のように考える。園における保育全体の理論的枠組みとそれに基づく保育課程編成表の記述内容は，基本的に，所属保育士の保育経験やその中で得た知識によって修正されていくものである。したがって，保育全体の理論的枠組みと保育課程編成表が成立して一定時間経っている場合，現在でも妥当といえるかどうかの確認を行う必要がある。本リサーチの場合，保育課程編成表の作成後，約半年経過していたので，その期間における所属保育士の保育経験と習得知識の蓄積によって，追加・修正が生じたと考えられるのである。

今後の課題としては，開発した自己評価観点明確化手順によって，他の一定保育実践についての自己評価観点も明確にする必要がある。その際には，自己評価観点の明確化手順も検討し，改善が必要であれば改善する。

続いて，明確化された自己評価観点に基づき，現在の年間指導計画，月間指導計画等を対象に，保育実践についての記述内容が保育課程を実現したものになっているかどうか検討し，必要な修正を行う。

また，その過程で，各段階の指導計画記述についての検討において，どの自己評価観点を重視すればよいのかの追究が必要となろう。また，各段階の指導計画記述についての検討の際に，どういう立場の職員がどの自己評価観点からの検討を行う必要があるかについても追究す

る必要があろう。特に，子どもの実際に応じて作成する短期の指導計画の場合，自己評価観点にとらわれて子ども理解に基づく柔軟な保育が妨げられたら問題である。保育の基準についての改革が保育現場で実現できないという問題を解決するためのマネジメントの研究は必要であるが，保育実践そのものの段階で保育の基本が妨げられない手順を開発する必要がある。この二つの課題を実現するために，明確化された自己評価観点をどう活用するかについての追究を行う必要がある。

最後に，本リサーチの限定性について考察する。御南保育園は私立である。私立の場合，創立時の基本的考え方があり，また，公立園のように人事異動で管理職が変わることは少なく，一貫性を持った実践を継続しやすい。本リサーチの成果については，まず私立保育園の範囲に限定して検討を進め発展させてから，公立保育園での応用を考えていくことが適切であるといえる。

―注―

1　筆者らが日常的に関係している保育所は，公的に○○保育園という名称を使っておられるので，そのことを尊重し，本研究では保育園という名称を用いる。

2　例えば，植田健男は，「教育課程経営論の到達点と教育経営学の研究課題」（『日本教育経営学会紀要』51，pp.34-44，2009）の中で，高野をそのように位置づけている。

3　田村は，このことについて，『カリキュラムマネジメントが学校を変える』(中留武昭，田村知子，学事出版，pp.42･43･50，2004)の中で論じている。

4　今後，ここでの「保育全体の理論的枠組み」の中に，例えば，子どもの思いを受け止めて満たすとか，子どもに充実感をもたらすとかの内容で，「保育者の子どもへのかかわり方」という項目を入れることや，「保育目標」間の関係について記述したりその記述に対応する形で「保育内容の構成の仕方」を書き直したりすることなど，より体系的な記述に改善するための検討を行う予定である。

5　これらの留意点の追究過程で，和多美知子（編著）『増補改訂版　あそびごよみ～指導計画　日案実践例』（西日本法規出版，2004）を参考にしている。また，渡邊祐三，横松友義，森英子，伊勢慎，小寺健司「昭和以降における子どもの縄とび遊びの質的変化の発達への影響に関する一考察」（『日本保育学会第61回大会発表論文集』，p.425，2008）は，その研究成果である。

6　この項目については、その後、すべての人が「五感」を有しているとは限らないので、「五感」の部分を「諸感覚」と修正することになった。

―文　献―

(1)　厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館，pp.125-126，2008

(2)　厚生労働省『保育所における自己評価ガイドライン』厚生労働省，2009

(3)　小田豊『'98改訂幼稚園教育要領解説①』小学館, p.12, 1999

(4)　高野桂一編著『教育課程経営の理論と実際―新教育課程基準をふまえて―』教育開発研究所，pp.i･ii･7，1989

(5)　中留武昭編著『カリキュラムマネジメントの定着過程―教育課程行政の裁量とかかわって』教育開発研究所，pp.107-108･110-112･330，2005

(6)　中留武昭，田村知子『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版，p.11，2004

(7)　倉本哲男『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究　サービス・ラーニング（Service-Learning）の視点から』ふくろう出版，p.4，2008

(8)　倉本哲男，前掲書(7)

(9)　倉本哲男，前掲書(7)，p.13

(10) 山中秀馬，横松友義「幼稚園における実効のある保育目標の明確化手順の開発―私立清和幼稚園でのアクション・リサーチ―」『教育実践学論集』12，pp.135-144，2011

(11) 横松友義，渡邊祐三「各保育園におけるこれからの保育課程開発のための園文化創造アドバイザーの支援に関する考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』141，pp.29-42，2009

渡邊祐三，横松友義「実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みを前提にした保育課程編成手順の開発―私立御南保育園でのアクション・リサーチをとおして―」『カリキュラム研究』19，pp.85-98，2010

(12) 秋田喜代美「学校でのアクション・リサーチ　学校との協働生成的研究」秋田喜代美，恒吉僚子，佐藤学（編）『教育研究のメソドロジー　学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会，pp.163-183，2005

(13) 横松友義，渡邊祐三，前掲書(11)

(14) 渡邊祐三，横松友義，前掲書(11)